

釈尊絵伝

—野生司香雪画伯の世界—

平等院 住職


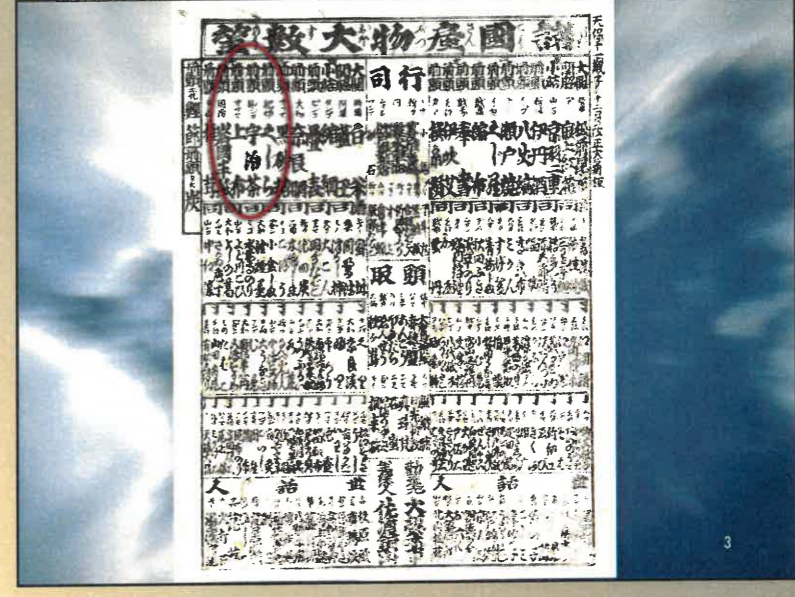
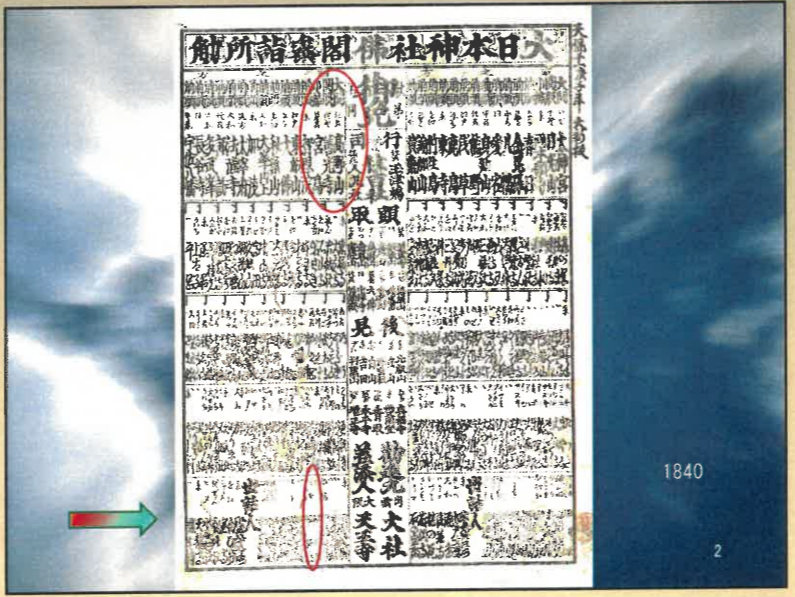
神居 文彰 (かみいもんしょう)

平成5年より 現職

(平成3年 大正大学大学院 博士後期課程単位修得 満期退学)

主著 「いのちの奪取り」(共著) 四風社刊
 「臨終行儀—日本のターミナル・ケアの原点—」(共著) 淡水社
 「葬祭仏教」(共著) ハジメ社
 「平等院物語—ある良かったといえる瞬間—」(単著) 四季社
 「平等院風凰堂—よみがえる平安の色彩美—」(単著) 東方出版
 「新版古寺巡礼—平等院—」(単著) 淡交社
 「平等院王朝の美—国宝風凰堂の仏後壁—」別冊太陽 平凡社
 「よみがえりゆく平等院」 学研ビジュアル文庫

現在 (公) 平等院 住職 (特) 埼玉工業大学 理事
 元、文化庁審議官兼委員
 平等院ミューズ 71歳 副館長 (前20号)
 メンタルケア協会講師 等

単なる名勝旧跡でない

古の口説口説の口説

時間の積層 物語性

文化の伝承 物語性



当時の視点に立つ
香雪の想いを掬い取る
曇曇の霜ノを掬い取る

7

蜘蛛の糸

芥川龍之介の「蜘蛛の糸」は大正7(1918)年『赤い鳥』創刊号に掲載されて好評を得た児童文学で、翌年には中学校などの国語読本にも採用された現代の童話である。

ラストの「自分ばかり地獄からぬけ出そうとする」「無慈悲な心が」と警告する芥川のことばに、仏典に仮託した西洋の思想が見え隠れすると古くから指摘されている。

実際、宗教学者であるポール・ケーラスの創作仏教説話「The Spider-Web 蜘蛛の糸」(1894)を仏教哲学者である鈴木大拙が翻訳したもの(明治31年=1898)こそ芥川に閃きを与えたという説は首肯出来る。主人公のカンダタ(憍陀多)の救済は蜘蛛を救ったことによるが、自分だけが救われたいというエゴイズムに再び地獄へと落ちていく。

仏典にはないこの話しの教導は、救済を示すのではなく、因果律のみを示す。

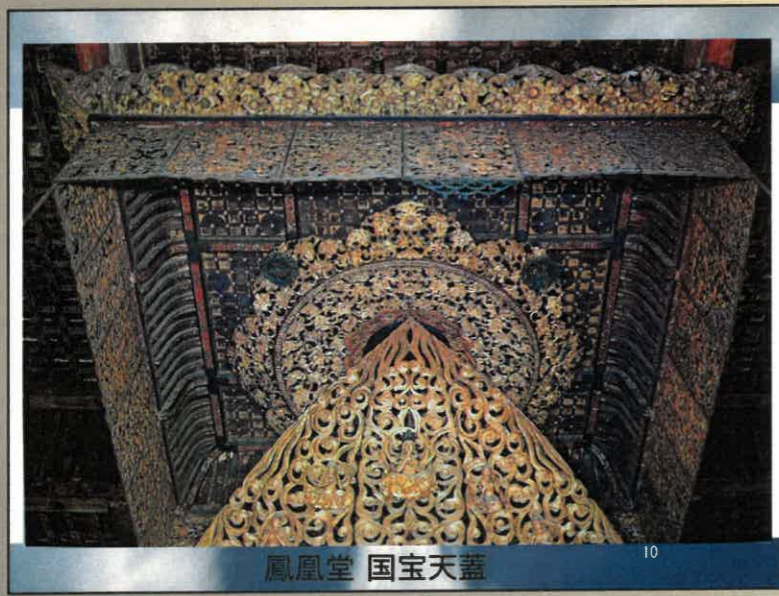


神居 文彰

8



芥川龍之介 蜘蛛の糸 日本教育紙芝居協会 S17 洞室邦画園

9

Point1. 朱線で描かれている。
→仏画を専門とする「絵仏師」は仏菩薩を朱線で描く (⇔世俗画を専門とする絵師)

Point2. 白色下地の上に描かれている。
→天井彩色をした人=落書きをした人
=仏画を得意とする絵仏師

鳳凰堂の絵画
本来、絵仏師が手がけるはずの壁壁画(仏画)に、世俗画を専門とする絵師が深く関わっていた。
伝統や型にこだわることなく、優れた技術をもった絵師を登用。

12

壁画模写

・天心
→国の精華

・江戸期は名所旧跡の対象になっていない
養鶴徹定による『法隆寺 金堂壁画仏像記』

大正6年(1917) 国華社出资 産官学連携
インド・アジャンタ石窟壁画の模写事業
荒井寛方 朝井観波 桐谷洗鱗 野生司香雪ら

「どうしても是は日本の画家の手で模写せねばならない」
瀧 精一(T6)

山崎辨榮 安政6年1859年-大正9年1920 (M27 1894)
杉本哲郎(S10)

13



平等院 鳳翔館 扉絵の間

壁画模写

法隆寺壁画模写 ⇒

輪飼徹定(幕末)
桜井香雲(M21 1884)
鈴木空如(M31 1898~)

荒井寛方 安田毅彦 前田青郁 入江波光

香雪

淑徳高等女学校 図画講師(1914-45年まで在籍)
輪島聞声尼 (嘉永5年1852-大正9年1920)

⇒ 福田行誠(文化5年1809-明治21年1888年)

15

明治 5年3月14日	教部省	
明治10年1月11日	内務省	社寺局
明治33年4月27日	内務省	神社局 宗教局



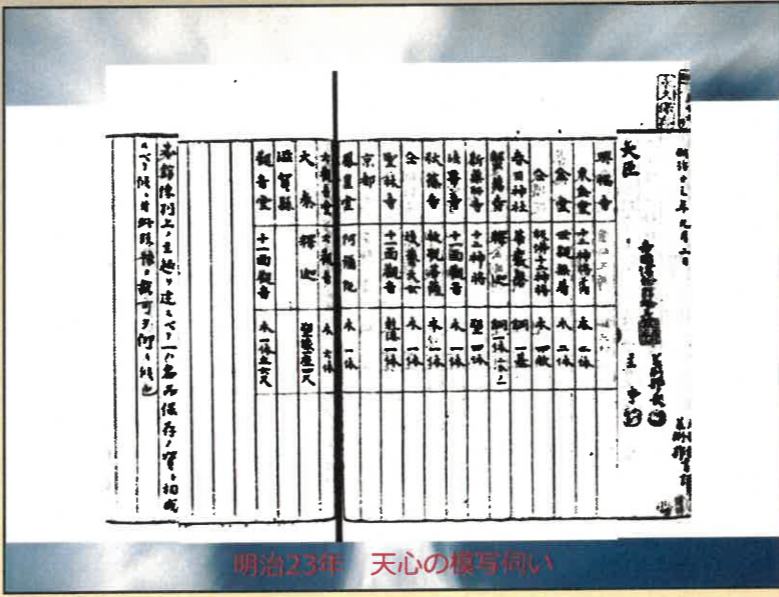
壬申検査 明治5年



教育物語 明治23年



岡倉天心



明治23年 天心の模写伺い

「古社寺保存の仕事は、研究を眼目としてやらねばならない、職人になってはだめだ、随って君等にやっ
て貰ふ仕事は、研究的なものでなくてはならないのだ。」
天心

内務省 江戸以来の既存勢力の管理 維持
国民教化行政としての宗教行政

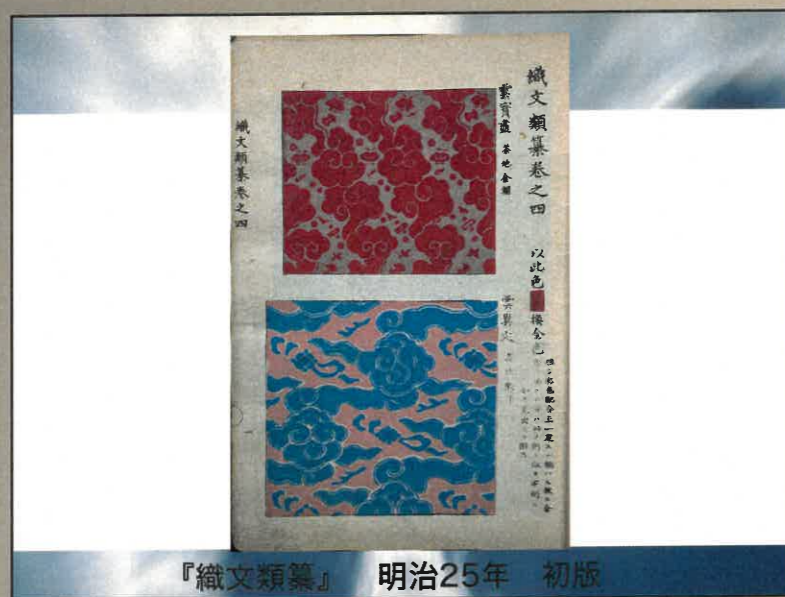
文部省 美術行政
学校教育行政 を根拠



『織文類纂』 明治25年 初版



『織文類纂』 明治25年 初版 2版 M40代



『織文類纂』 明治25年 初版

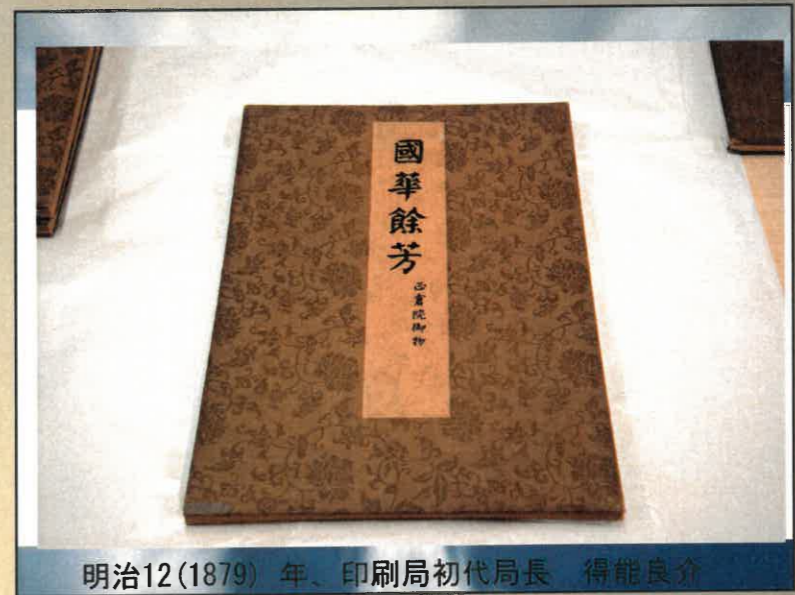
明治 4年 古器旧物保存方 博物局
農商務省→宮内省
「古器舊物ヲ保全セシム」 明治4年5月23日太政官布告

明治21年 臨時全国宝物取調局

明治13年 古社寺保存金制度
内務省社寺局

明治30年 古社寺保存法

昭和 4年 国宝保存法



明治12(1879)年、印刷局初代局長 得能良介



古美術品が外国へ流出していることへの懸念 印刷局製品の参考

明治 9年 工部美術学校
予科、画学科、彫刻科

明治13年 京都府画学校
文人画、大和絵、狩野派、西宗

明治22年 東京美術学校

明治35年 京都高等工芸学校

明治38年 関西美術院

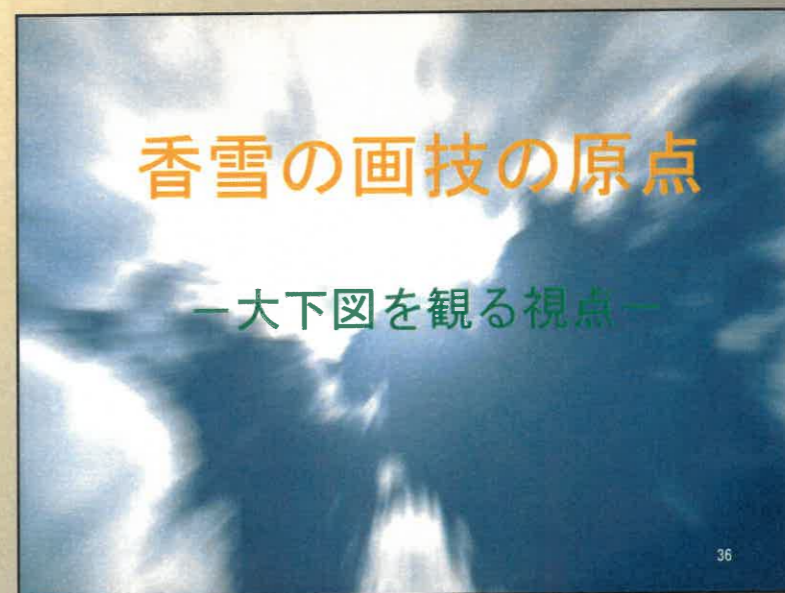
明治40年 文部省美術展覧会

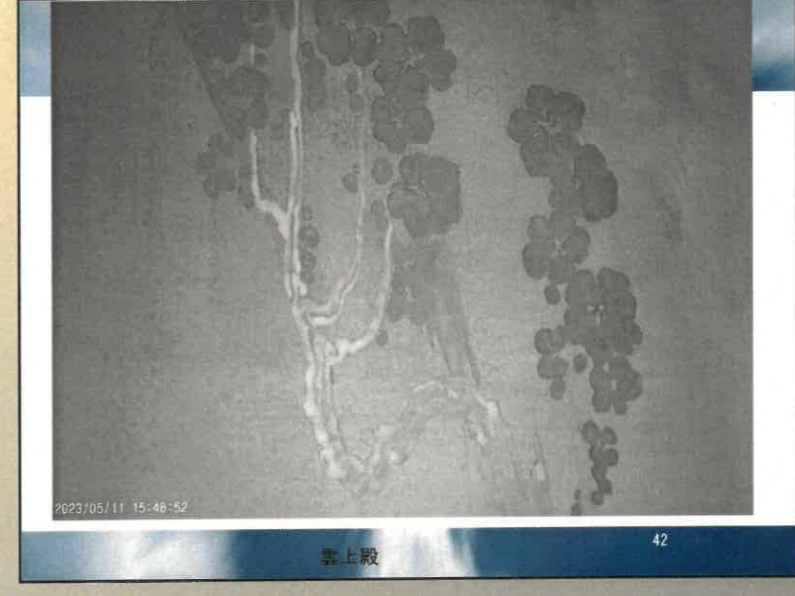
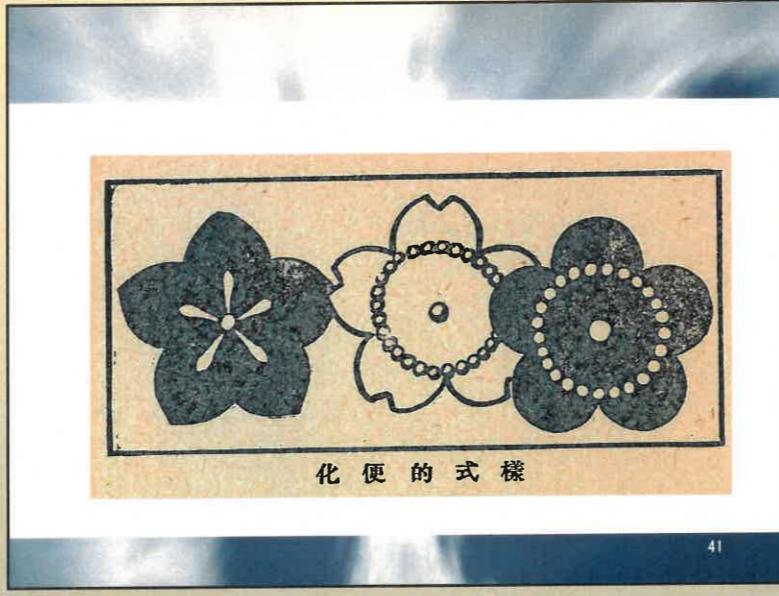
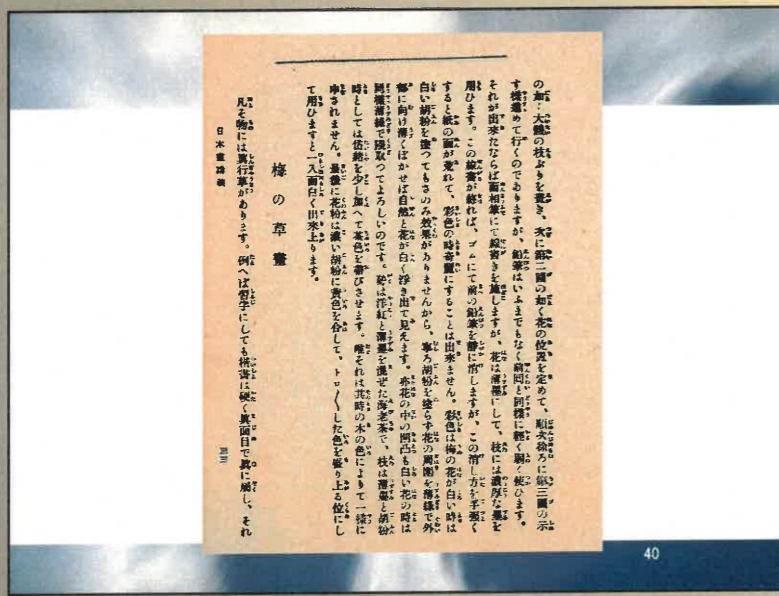
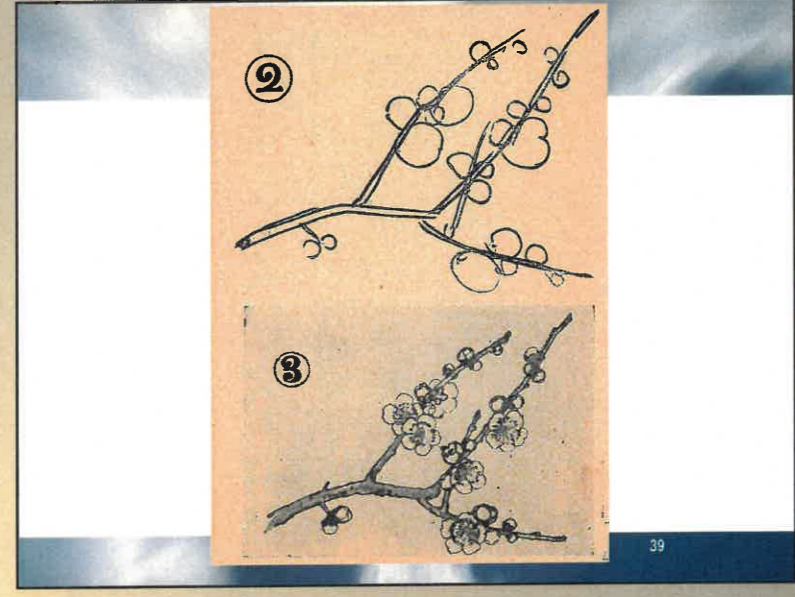
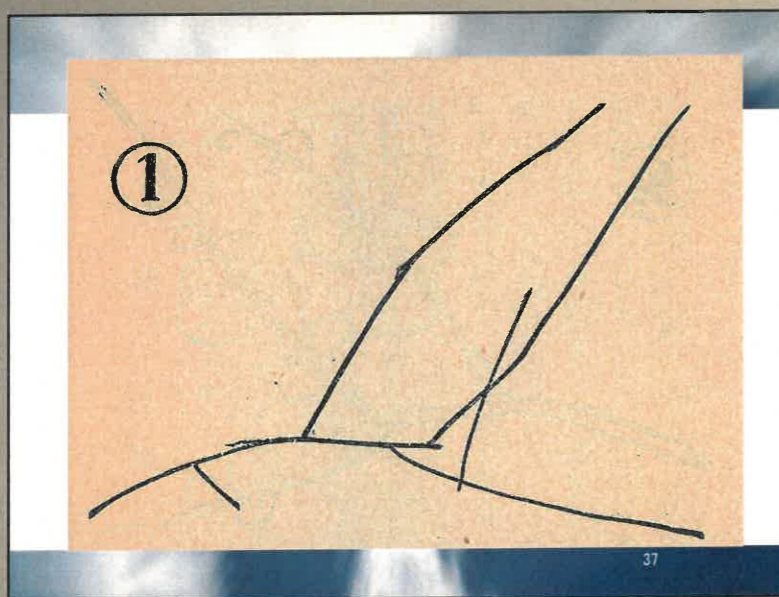
内国勸業博覧会 78、81、90、93、02
万国博覧会73(ウィーン)、93(シカゴ)、00(パリ)

普通修理法

普通修理法

- ・ 現在遺されている造像時の良い姿を、これ以上損傷しないようにし、出来るだけ長く後世に伝える。
- ・ 制作当初の部材や彫刻面、彩色、漆箔を尊重し、これを傷つけないようにして、修理部分の仕上げは当初仕上げを生かして、出来るだけ控え目にする。
- ・ 欠損部の復元や追補は、最小限にとどめる

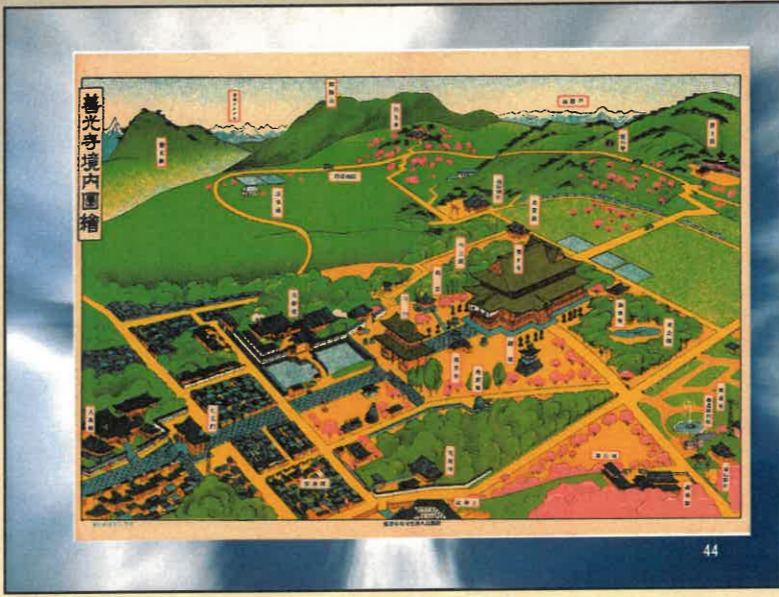






雲上殿

43



44



吉田初三郎 S5

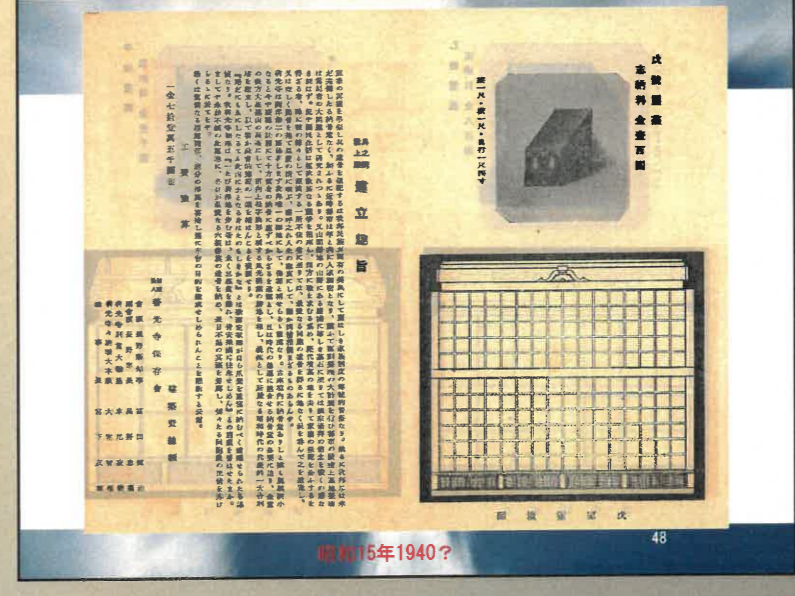
「七年に一度の御開帳を控えた仏都長野のある秋の境」

45



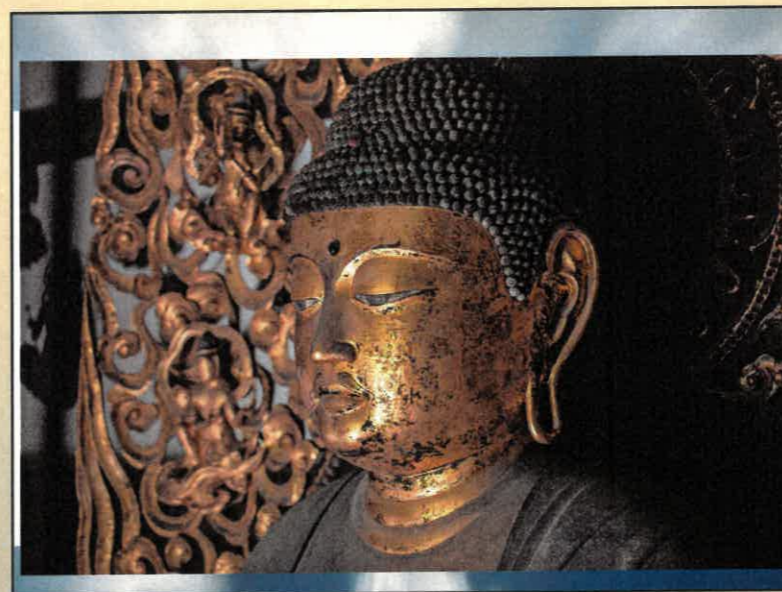
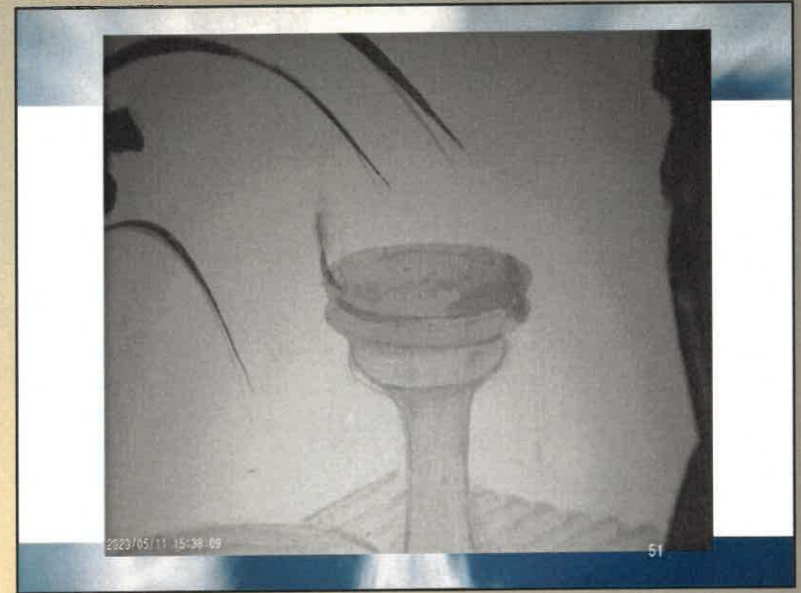
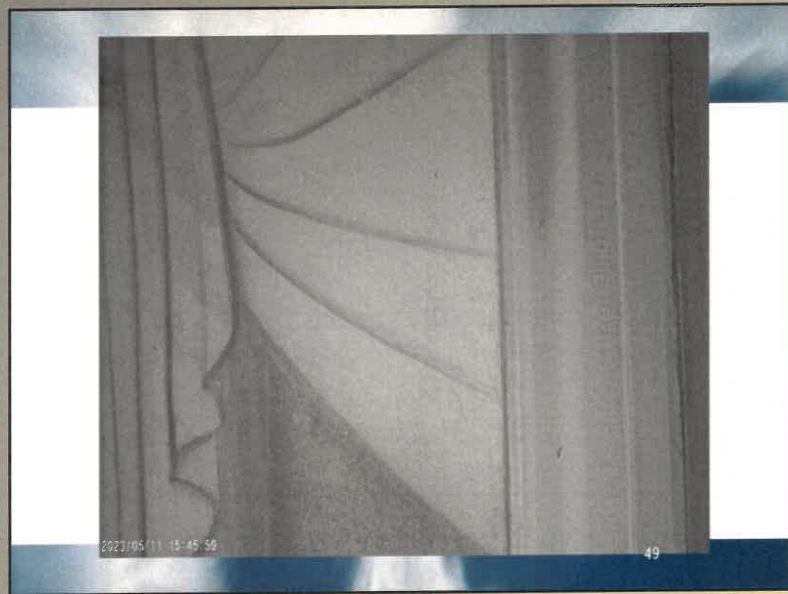
昭和20年1945 ころ?

47



昭和15年1940?

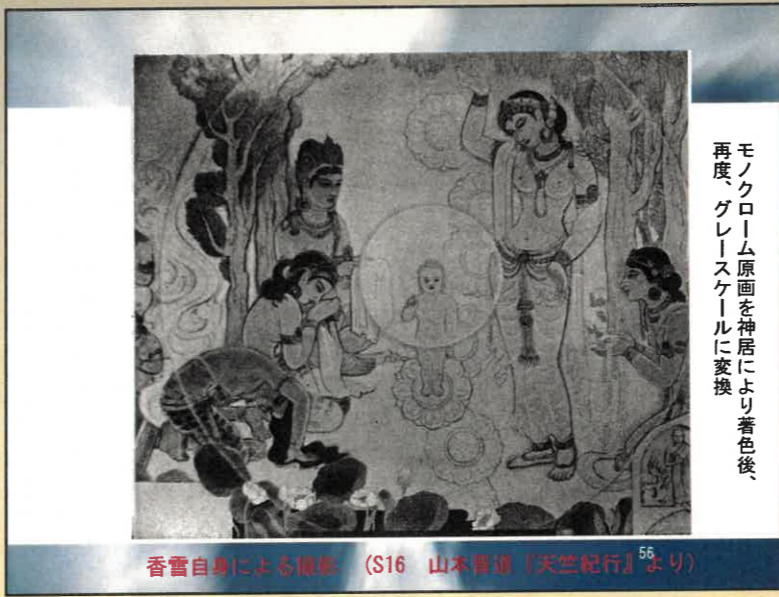
48





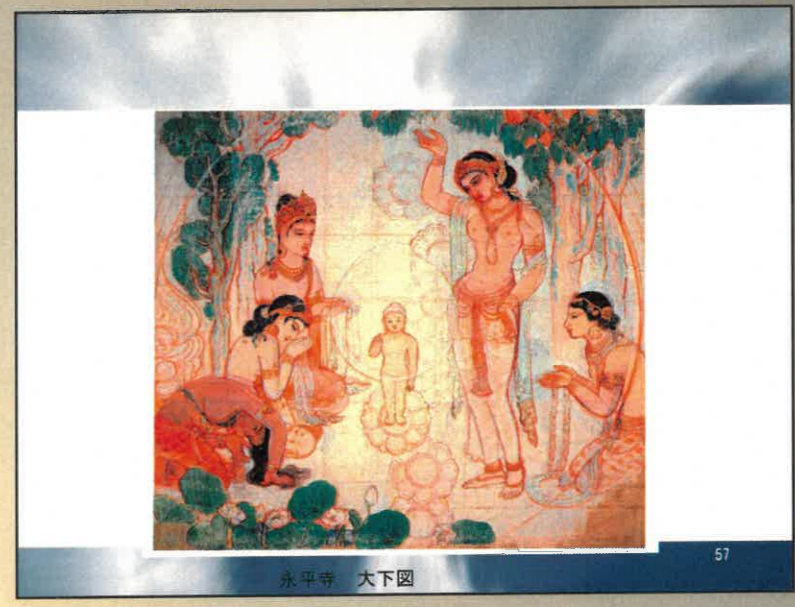
香雪 木版画「紅葉」(113)

55



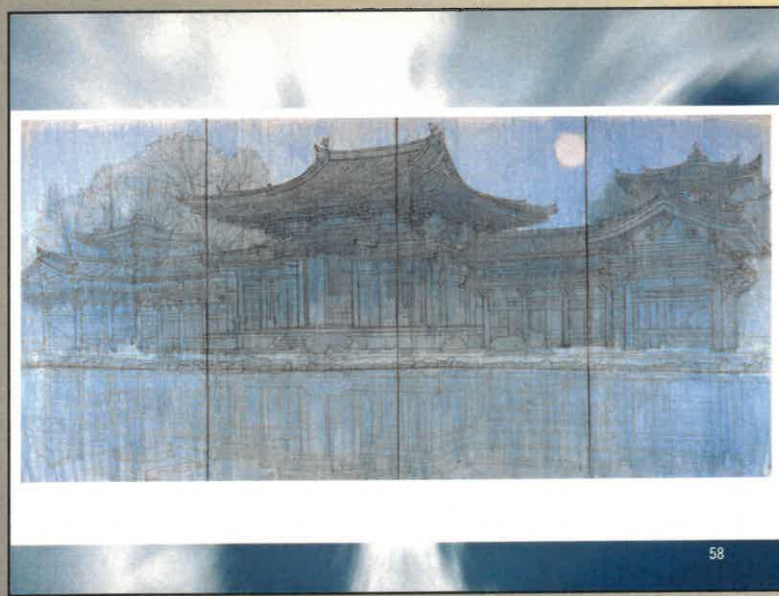
モノクローム原画を神居により着色後、再度、グレースケールに変換

香雪自身による複製 (S16 山本晋道「天竺紀行」⁵⁶より)



永平寺 大下図

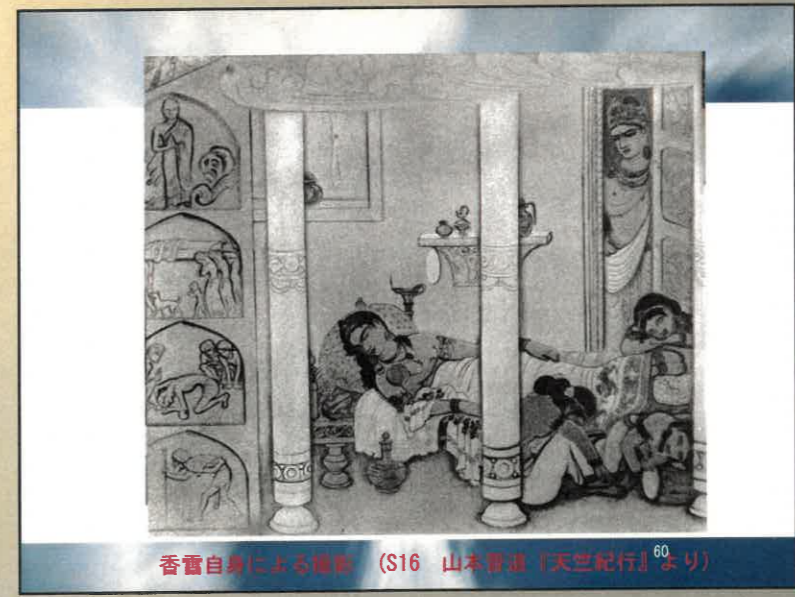
57



58



59

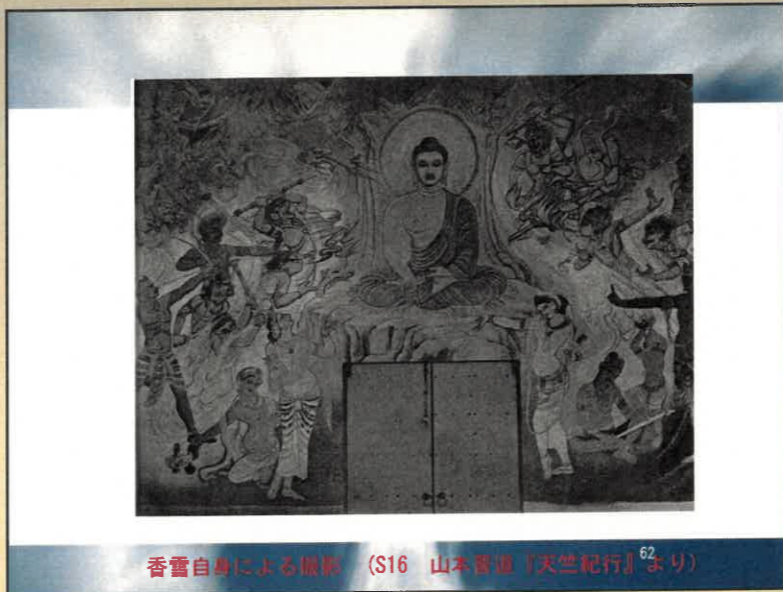


香雪自身による複製 (S16 山本晋道「天竺紀行」⁶⁰より)



永平寺 大下図

61



香雪自身による撮影 (S16 山本晋道『天竺紀行』⁶²より)



香雪自身による撮影 (S16 山本晋道『天竺紀行』⁶³より)



壁画制作途中、ベツバ発掘の仏舎利容器に偶然、接する。
S2 香雪自身による撮影

「野生司氏は希に見る敬虔な仏教徒でした。
… (中略) …
野生司氏はこの地の誰からも敬慕されてをりました。
… (中略) …

ここに生けるが如く示されてある大聖釈尊の慈悲と知恵に輝く御一生涯は、ここに御安置まうしてある釈尊のご遺骨と共に、どんな深い尊い印象をそれら世界の巡礼者に興ふることでせう。」
サンガラタナ師の詞
前掲 P268上

65



印度 混沌

66

S22

見返し図案解説
野ノ生司 香雪

混沌、現実の印度を端的に言つたならば混沌の二字に盡きる。この混沌は国家的煩悩であらうか。水濁れた「ガンデス」の流れば悠久そのものである。偶々そこに神への嚮慕とて、無量数の十萬の群集が湧き、ある行者は牛糞を糺した灰にて、一糸纏はざる全身を化粧し、聖火を祈つて夜を徹する。一方には生鬘の山羊を、次から次へと屠つて、生々しい血を供養するものがある。その奇々怪々たる宗教作法は、三千年前の神話の時代を想わしむるもので、その了解は神人交感を目撃する、彼等のみで心伝心する世界で、それが雑沓中象に乗るものあり、駱駝に鞍すものあり、又猛獸を御するものあり、総じては夢かお伽那の国で、近代文化とはあまりにも縁の遠い存在であるが、科学という智慧の実を偷んだ人間は一顧すべからざる。香雪の末裔、孫外箱の絵はソムラより遙かましヒマラヤ山系である。

67



小野虎太郎とともに サルナート S29

68

蓮 清浄 仏教	} 配合と調和	色の感情
青 沈静 茶 暖かみ 橙 活躍の気		

香雪 色の性質
『早稲田高等女學講義』第18 T12
69

**出会うことの
意味を問う**

本来見えない世界に
色彩を見出す
記憶や経験にまで
アプローチする

70

仏伝
生涯をあらわす。
説話
絵画
彫刻
建造物
空間

印度では編年体の歴史書は皆無

71

仏伝は、一方で仏弟子の物語

仏陀の生涯 → 何のシンボルか

何を読み取るのか

今の自身の意味

今、目をそらさない

72


ガウタマ
最上の牛
優れた牛

優れに牛

73
浄全2、36上

生まれを問うこと勿れ
行いを問う
なぜ、釈尊の生涯が問題となるのか

74



マヌ法典では、選ばれたカースト以外から食事を受けてはいけない。

チュンダの意味
涅槃
生身
法身(真理)
→500年

これ以降、現世では、もう仏に見えることは難しい
→他界での見仏の萌芽

75
釈尊絵伝 涅槃

ストウパー
仏陀の姿なき仏伝彫刻

BC20
仏伝彫刻の中に

BC10
仏陀の姿が強調
独立した像

三十二相

紀元前後
10 ガンダーラ
マトゥラ

76

仏教伝道協会本

当初12枚(風景)を計画
→7枚に留まる
一月ずつのカレンダー形式

製作途中、脳出血を患う
治療とリハビリを繰り返しながら…
S34. 7月に筆を措く

香雪最後の大作

香雪自身の「時」を描いた(神居)
めくるといふ媒体 = 紙芝居的物語

77



摩耶夫人のこと
夢象 → 共有

人の誕生のためには必ず個人以外の存在が必要

時機に至るといふこと
真理のために輪廻した

サルナートのものでは菩薩らが見守る

六本の牙
→咀嚼
六波羅蜜

78
釈尊絵伝 託胎



サルナートでは蓮華の表象
梵天が金色の絹で受ける
表現もある。

より親しみやすく

供養者の反転
様々な種族

右は神聖

釈尊は誕生の「苦」(=思い
通りにならない)を味あわ
ず、自身であらわれた

七歩 六道(輪廻)を越える

布髪(の)礼は、出土品から香
雪が考案 79

釈尊絵伝 降誕

母、摩耶は、七日後に死去


80

天上天下 唯吾獨尊
今茲而往 生分已盡

全ての世界で尊いのは、ただこの世界
にいる独り一人である。
今ここに生まれ、再び生に迷うことは
ない。

解 脱

81



生まれを棄てる
19歳

選ぶ
生活か宗教か


行

二苦
内苦外苦

サルナートは、空を飛ぶよう 82

釈尊絵伝 出城

大和絵風



吹抜屋台
斜投象的図法
連続式
離れて鑑賞
方向を持つ

サルナート



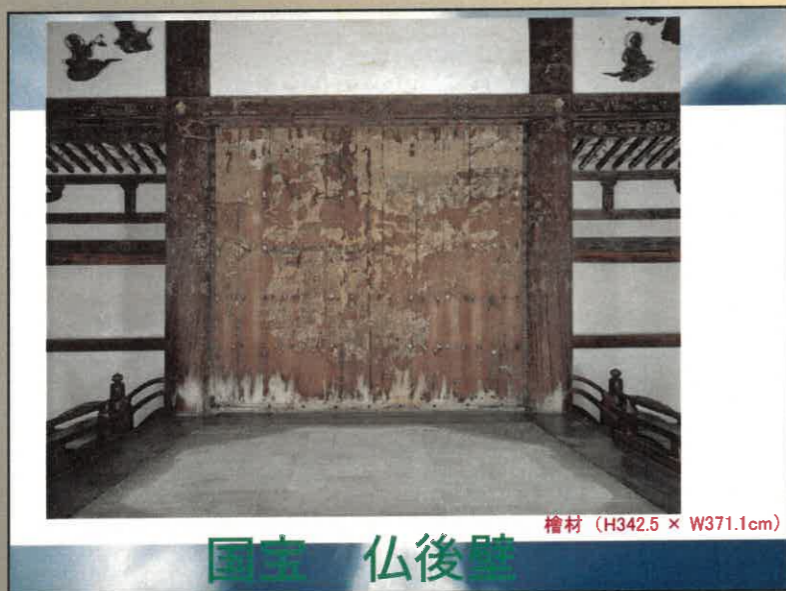
国宝 法然上人絵伝 1



国宝 扉絵



国宝 本尊阿弥陀如来坐像 国宝仏後壁

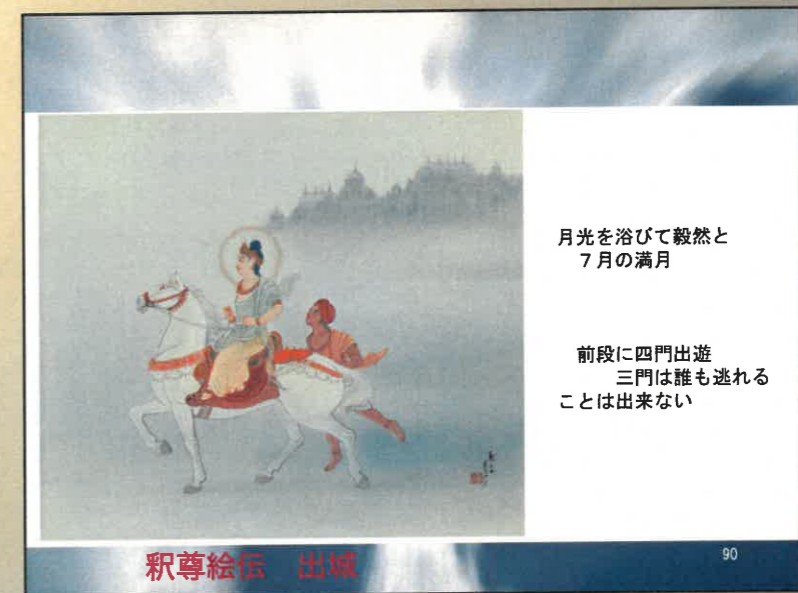


国宝 仏後壁

檜材 (H342.5 × W371.1cm)



国宝 仏後壁



釈尊絵伝 出城

月光を浴びて毅然と
7月の満月

前段に四門出遊
三門は誰も逃れる
ことは出来ない

90

四住期

学生期
 家住期
 林棲期
 遊行期

91

出家


家出ではなく、
 社会のシステムから出ていく

聖なる生活の恵み
 真理の教えに導かれ
 自身を自由に。

92

S36.7 7枚のうち最後に書き上げた

サルナートは白衣



様々な行を経て
 悟れない目覚めない
 供養を受ける
 尼連禪河
 菩提樹の下に坐す


乳粥 スジャカ
 価値ある供養
 (ブジヤナ)

人生は選択の連続

釈尊絵伝 牧女の供養

93

香雪はこの画を第一に仕上げた



菩提樹
 東面
 禪定
 魔王が絶大な妖気
 兵は、
 怒り 欲望 妄執
 恐怖 嫌悪 名誉
 など
 苦しみの正体
 =それらに縛られる自身
 降魔の印
 覚 証悟
 =涅槃、解脱、気付き

94

正地は、初転法輪そのものに関わる

釈尊絵伝 成道

境界の接点
人間
どのような
結びつきを持つか
縁

95



境地を味わう
 梵天勧請
 悟りの体験と言語化
 他者にもその状態を。
 五比丘は当初修行を棄てた
 釈迦を拒む(軽蔑)。
 威儀
 自然に座を与える
 話すために来た
 悟りとは何か

釈尊絵伝 転法輪


96

相手に応じて。
「三宝の成立」

中道 四諦 八正道
道の人 戒cilaの実践者

慈悲と智慧 輪廻からの解脱

97



頭北面西
満月に照らされる

聖者の無余涅槃
それでも悲しい

開眼

釈尊絵伝 涅槃

98

生じたものは、必ず滅する

必ず別れがある

今だけが絶対ではない 願溢血 画梁

全て説き了ぬ 釈尊

法は様々な形で私達に真実の道を
照らし続ける

99



救済である。


私達の希望であり、

100

①仏 伝
何を伝えたかったのか

②どこに残っているのか
存在すること

③これから
どうしていくのか
保存とメンテナンス 精神の継承と広範



102

